
 学 会 記 事

第4回 DIC 研究会

日 時 平成9年6月20日(金)
午後6時より

会 場 ホテル新潟 3階
飛翔の間

一 般 演 題

1) 妊娠性急性脂肪肝が疑われた DIC の1例

村川 晴生・渋谷 伸一
八幡 哲郎・関塚 直人
長谷川 功・高桑 好一 (新潟大学)
田中 憲一 (産科婦人科学教室)
勝井 郁・倉持 元 (同
内科学第二教室)
和栗 暢生・市田 隆文 (同
内科学第三教室)
吉川 恵次 (同 救急部)
渡辺 逸平・篠永 真弓
佐藤 一範 (同 集中治療部)

妊娠性急性脂肪肝は、妊娠中期から後期に発症し急激に肝不全に陥り母児ともに死亡率の高い重症肝疾患である。今回我々は妊娠中期に重度肝機能障害から DIC に至り、臨床経過から原因として妊娠性急性脂肪肝を強く疑った症例を経験したので報告する。【症例】33歳、0妊0産。妊娠成立後近医で妊婦検診を行っていた。妊娠30週頃から頻回の嘔吐、黄疸が出現し、生化学検査で GOT:180 IU/l, GPT:244 IU/l, T.B:3.6 mg/dl と重度肝機能障害を認めたため、妊娠31週に当科へ母体搬送された。入院時所見は、APTT 44.5秒(対照32.7秒)、プロトロンビン時間16秒(55%)、ヘパプラスチンテスト48%、フィブリノーゲン 165 mg/dl, FDP 34.8 μg/dl。なお妊娠中毒症の所見はなく、血小板も正常であり、HELLP 症候群は否定できた。またウイルス感染の検索でも異常は認められなかった。DIC 治療開始後も臨床症状および検査データの改善傾向認めず、これ以上の内科的治療による経過観察は不可能と判断し、妊娠32週に帝王切開術を施行した。術後24時間経過した時点で突然の呼吸停止および意識消失・血圧低下を認め、直ちに挿管し ICU へ入室。創部の皮下出血が原因と思われる出血性ショックが考えられ、再開腹・止血後ドレーン留置を行った。術後は輸血(MAP, FFP, PC)およ

び急性腎不全に対して接続的血液濾過透析(CHDF)管理を行い、高ビリルビン血症および高アンモニア血症に対しては随時血漿交換を行った。ドレーンからの出血は速やかに減少し、全身状態も回復したため抜管ののち ICU を退室した。【結語】妊娠時にみられる重度肝機能障害は termination 前後での母体管理がその予後を決定する。今後もこのような症例に対しては、ICU・他科とより密接に連携して管理を行っていく方針である。

2) 高度肝障害、DIC を合併した腹部大動脈瘤の1手術例

名村 理・山本 和男
大関 一・曾川 正和
島田 晃治・諸 久永 (新潟大学外科学)
林 純一・江口 昭治 (第二講座)
田辺 靖貴・庭野 裕恵 (同
内科学第一講座)
丸山 貴広・馬場 靖幸 (同
内科学第三講座)
小山 寛 (済生会新潟第二
病院診療第一部)

大動脈瘤は、高頻度に凝固線溶異常を合併し、DIC を発現することもあるが、多くは代償され臨床症状を呈するものは稀であるとされている。我々は、高度肝障害による凝固因子産生低下を伴い、内科的コントロールが困難であった DIC を合併した腹部大動脈瘤の1手術例を経験したので報告する。

症例は76歳男性で、下血を主訴に近医を受診し血液検査で DIC (score 7点) と診断され入院。精査で最大径 6.1 cm の腎動脈下腹部大動脈から両側総腸骨動脈に及ぶ動脈瘤を認め、それに伴う DIC と考えられた。また、高度肝障害(KICG 値 0.039/min)も同時に指摘された。FFP による凝固因子の補充療法、メシル酸ガベキサート(FOY)等の投与を行い DIC のコントロールを試み、一時的に改善したが、FOY を中止することにより DIC の増悪傾向を認めた。このことから、DIC のコントロールに際し瘤に対する外科的処置が不可欠と考えられた。手術は出血のリスクを軽減し、動脈瘤の血栓化を図り DIC の原因を除去する方針とし、次のような術式とした。すなわち、瘤に出入する血管を遮断し動脈瘤を空置し、Y型人工血管を用い腎動脈下腹部大動脈から右総大腿動脈、左方腸骨動脈にバイパス術を行った。術後も FFP, FOY の投与を継続し経過は良好で、術後20日目に FFP, FOY の投与を中止したが出血傾向は認めなかった。一方、肝障害に対しては高アンモニア血症の予防を主眼とし、ラクツロース、カナマイシン等

を投与し合併症無く経過した。当科退院時(術後27日目)、DIC score は3~4点に改善し、術後のCT検査では残存した瘤内の血栓化は良好でDICの原因が除去されたと考えられた。

3) 小児細菌性髄膜炎における播種性血管内凝固症候群(DIC)の意義

渡辺 徹・佐藤 雅久(新潟市民病院)
阿部 時也・小田 良彦(小児科)

〔目的〕小児科領域においても悪性腫瘍、重症感染症時にDICの合併を認めるが、その頻度は低く、臨床的意義は明らかでない。今回の検討は、小児期重症感染症の1つである細菌性髄膜炎におけるDICの臨床的意義を明らかにすることを目的とした。

〔対象〕1980年4月から1997年3月までの17年間に新潟市民病院小児科に入院となった細菌性髄膜炎の34例(1カ月から9才、男19例、女15例)を対象とした。

〔方法〕1) 全症例の起炎菌、DICの合併頻度および予後、2) DIC合併例の臨床・検査所見、3) DICの有無による各種臨床所見(ショック、腎不全、呼吸不全、肝機能障害、予後)について検討した。

〔結果〕1) 全症例の起炎菌はインフルエンザ桿菌10例、肺炎球菌8例、B群溶連菌2例、大腸菌1例、不明13例で、5例が死亡し、6例にDICの合併を認めた。2) DIC症例の起炎菌はインフルエンザ桿菌3例、肺炎球菌2例、不明が1例で、3例が死亡した。DIC合併生存例のうち1例はメシル酸ナファモスタットのみでDICの改善を認めたが、2例はメシル酸ナファモスタットで改善なく、出血症状を認めたが、ヘパリン、低分子ヘパリン投与により改善した。3) DICの有無による臨床所見の検討では、DIC例でショック、呼吸不全、肝機能障害の合併頻度、死亡率が有意に高かった。

〔まとめ〕小児細菌性髄膜炎でDICを合併する例は多臓器不全を示す重症例で、予後不良であった。メシル酸ナファモスタットが無効で、ヘパリンあるいは低分子ヘパリンが有効な例があった。

〔結論〕細菌性髄膜炎におけるDICの合併は予後不良因子である。

第64回膠原病研究会

日 時 平成9年6月4日(水)
午後6時~
会 場 新潟大学医学部
有壬記念館

I. 一般演題

1) アミロイドーシスを合併したベーチェット病の1例

大原 一彦・田中 孝幸
桑原 克弘・八木 一芳
後藤 俊夫・小田 英司
桜井 金三・関根 厚雄
阿部 道行・飯泉 俊雄(県立吉田病院内科)

症例は、40歳男性。口腔内アフタ、発熱、虹彩毛様体炎、毛嚢炎様皮疹出現。さらに浮腫、軽度の腎機能低下認められ、当科紹介腎生検と胃生検にて、アミロイドーシスと判明した。アミロイドーシスを合併したベーチェット病の希な1例を報告した。また、Dilsenらは男性に圧倒的に多く、完全型に多いと報告しているが、日本からの報告7例では、男女比は4:3であり、タイプはDilsenらとは反対に不完全型に多かった。

2) 持続性蛋白尿に対するACE阻害薬の有効性が示唆されたループス腎炎

長谷川 尚・榎谷 博也
石川 肇・遠山知香子(県立瀬波病院)
中園 清・村澤 章(リウマチ科)
大澤 治章(同 理学療法科)
岡 一雅・宮川 芳一
仲丸 司・大澤 豊
黒田 毅・柄澤 良
島田 久基・上野 光博
西 慎一・中野 正明
荒川 正昭(新潟大学第二内科)

【症例】30歳、女性。1988年、浮腫、蛋白尿、抗核抗体、抗DNA抗体陽性、低補体血症などからSLEによるネフローゼ症候群と診断された。プレドニゾン(PSL)60mgなどにより改善した。1994年10月、ネフローゼ症候群の再発を認めた。PSLの増量、シクロフォスファミドパルス療法にもかかわらず、蛋白尿の減少は認められなかった。ネフローゼ症候群が持続するため、1996年4月10日、当科に入院した。下腿に浮腫を認め、蛋白尿(7.1g/日)、血尿、高コレステロール血症を認めた。総蛋白は4.6g/dl、アルブミンは2.5g/dl、Ccrは72ml/